

《ジェネラリスト BOOKS》  
知識がつながる抗菌薬  
まるわかり感染症診療

岡本 耕 監修/伊東 完 著

＜書評者＞ 天野 雅之（南奈良総合医療センター総合診療科部長）

感染症診療が“勉強しづらい”と感じる原因は、知識そのものの量よりも「知識同士のつながりが見えにくい」点にあります。抗菌薬、臓器別疾患、患者背景、微生物、検査、合併症。一つひとつは勉強したはずなのに、いざ現場では「根拠が曖昧なまま、なんとなく抗菌薬を処方してしまった」というモヤモヤを抱える若手医師も多いはずです。

伊東完先生の『知識がつながる抗菌薬—まるわかり感染症診療』は、その曖昧さに対して感染症診療の全体像を与えてくれる一冊です。「ジェネラリスト NAVI」での連載を書籍化したもので、内容は「病原体/抗菌薬」「感染臓器」「宿主」という感染症診療の三大要素に沿って組み立てられています。

各章の冒頭には簡潔な総論が置かれ、個別の知識に入る前に「いま何を学ぼうとしているのか」が見えやすい構成になっています。微生物のみを独立して取り上げず、各章の流れの中で扱われている点も読みやすさに寄与しています。

本書の魅力は、知識を整理するだけでなく、現場での使用感が伝わってくる点にあります。現場で頻用されるセフトリアキソンの副作用の考え方、サイトメガロウイルス治療における抗ウイルス薬選択の悩みなど、経験豊富な指導医とやりとりしながら教えてもらっているような感覚で読み進められます。

また、本書の内容は感染症を起点として「内科学全体」につながっています。尿路感染症診断のピットフォール、肺炎と誤診しがちな非感染症疾患への警鐘、G-CSF 製剤使用時の動脈炎への配慮など、感染症診療時に気を付けたい周辺の内科知識も自然に学べます。

通読向きの書籍ですが、医学生や研修医など現場経験の少ない読者が冒頭の抗菌薬の章から読み始めるのはややハードルが高い可能性があります。その場合は、実際に現場で遭遇した症例に関連する項目を「感染臓器」の章からピックアップして読むと良いでしょう。

一方、感染症診療にかかわっているが、上級医に言われるがまま抗菌薬を選んでいて、なんとなく処方しているが、全体像がつかめていない。判断の根拠を自分の言葉で説明しきれないといった段階にいる読者なら、冒頭から通読することで感染症診療の解像度がぐっと高まります。読後には、病原体・臓器・宿主の観点を行き来しながら治療戦略を考える感覚が身につくでしょう。

まとめると、感染症診療における意思決定を、受け身でこなすものから、根拠を持って能動的に判断するものへ変えていく。そのための足場になる一冊です。感染症診療にかかわる内科系専攻医や総合診療医、そして日々の抗菌薬処方に「納得感」を持ちたい読者に推薦します。

● A5 頁 304 2026 年 3 月

定価：4,400 円

（本体 4,000 円＋税 10%）

[ISBN978-4-260-06548-1]

医学書院刊